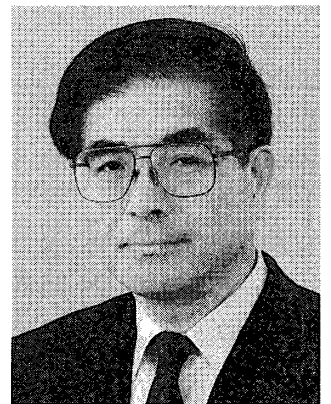


## 優良資産の活用で新たな発展をめざそう

中央大学 教授 今野 浩



このたび、本学会の会長職をお引受けすることになりました。諸先輩や同世代のメンバーの中には、私より遥かに有能でOR学会の発展に貢献された方が沢山おられます。したがって、それらの方々をさしおいてこの仕事を引受けることには、かなりのためらいを覚えました。しかし私は、“頼まれたことは断らない”というこれまでのモットーに従って、この大役をお引受けすることにしました次第です。

これから2年間、諸先輩と同輩諸氏、それから後輩の皆様の御協力の下に、会員の皆さんが、気持ちよく研究・教育・実践活動に励むことができるような条件の整備に心がけたいと考えています。

とはいうものの、私は困難な状況の下にある学会運営について、これといった妙案をもちあわせているわけではありません。(賛助)会員の減少、慢性的な財政問題、ORに対する社会の評価が十分とはいえないことなど、どれもなかなか難しい問題に違いありません。

しかし私は、OR学会の将来について悲観する必要はないと考えています。ここで挙げた問題はどこの学会にも共通のものであり、OR学会だけが特別にひどい状態にあるわけではないからです。またOR学会がもつ“人的資産”の豊かさは、他の諸学会に比べて遜色がないどころか、十分に誇るに足るものだと考えているからです。

私がORの専門家になろうとした60年代のはじめ、ORは現在でいえば、“IT”に匹敵する時代の花形でした。次々と新しい理論が生まれたのはこの時代です。しかし70年代、80年代を通じ

て、ORは様々な批判を受けました。“ORは役に立たない”、“ORは数学をいじるおあそびだ”、“企業のOR部門が次第に姿を消している”、等々。

しかしその一方で、90年代に入ってから、IT技術の発展とタイアップしたOR技術のブレイクスルーは、誠にめざましいものがあります。例えば整数計画法がそれです。役に立たないということで、長い間見捨てられていた方法(切除平面法)が劇的な復活を遂げ、いまや実用規模のスケジューリング問題や組合せ最適化問題、さらにはSCM最適化問題などを手軽に解くことができる時代がやってきたのです。

ORはこれまで膨大な資産を積み重ねてきました。一部に不良資産があるとしても、ほとんどは優良資産です。しかしわれわれは、これらの資産の存在とその有用性を社会に対してアピールする作業を怠ってきました。謙虚なエンジニアにとって、大声で自分たちの実績を喧伝することは、“はしたないこと”だと感じられたからでしょう。しかし黙っていたのでは、人々はわれわれの仕事を理解してくれません。

私はこれから皆さんの先頭に立って、ORを世間にアピールしていきたいと考えています。また本誌の誌面などを通じて、学会員諸氏(特に若い人々)に積極的に語りかけたいとも考えています。

20世紀エンジニアである私の「ORの旅路」も、いまや最終段階を迎えました。これから先2年間、これまでに比べてやや大胆に、学会発展のため努力したいと思いますので、どうかよろしく御支援下さいませようお願いいたします。